

両方に2つのタイプが存在することを指摘した。

また、口縁部に“2つの耳状貼付け”をもつ土器の存在も提示した。同様に前平式土器、吉田式土器、塞ノ神式土器等の概要を説明し、“円筒貝殻文土器”の時期と編年について考察している。それぞれの特徴から「直行・粗雑型の前平式土器。精製・外反型の吉田式土器、外反・山形・肥厚型の石坂式土器。円筒・くびれの強い外反・そして文様多様化の塞ノ神式土器と続くと思われる。すなわち器形的には直行から外反、肥厚、山形と変化し文様も口縁端部から頸部へと変化すると考えられるからである」と述べ、前平式土器→吉田式土器→石坂式土器→塞ノ神式土器という編年を示した。塞ノ神式土器を除いた3型式の編年は、それまでの河口のそれとは全く逆の結果となっている。また、時期については、これらの型式がアカホヤ火山灰下のものであることを指摘し、塞ノ神式土器を前期初頭に、他の3型式を早期に位置づけた。この編年は、型式学的な要素をもとにした組列であり、層位的検討は具体的に示されていない。つまり、当初から河口が提示している石坂式土器と吉田式土器の層位関係については言及されていない。しかし、石坂式土器の細分としては先駆的な研究であり評価されよう。

さて、論文「塞ノ神式土器」で南九州の縄文時代早・前期の土器文化を整理した河口は九州縦貫自動車道建設に伴う石峰遺跡（鹿児島県始良郡溝辺町）の発掘調査を担当した。その調査報告書の中で、南九州の縄文土器文化についての概要を述べている（河口1980）。

それによると、早期の土器文化を「縄文系・貝殻文系・押型文系」の3つの系統に分け、その中の貝殻文系の一番古い時期に石坂式土器を位置づけ、吉田式土器、前平式土器へと続いていくとしている。これは、これまでの河口の考えと同様であるが、注目されるのは、石坂式土器の前段階に位置する土器を示したことである。それは連点鋸歯文土器と呼ばれるもので、「口縁部に刺突連点文を、胴部には縦位の沈線を施文する円筒形の土器である。（中略）早期初頭に位置するものと考えられ、器形等から貝殻文系の土器との繋がりが考えられる」と説明されているものである。

また、石坂式土器についても石峰遺跡出土土器を中心に説明している。これまで河口が示した定義とほぼ同様であるが、器形の中にこれまで見られなかった直行タイプが存在すること。また、先に弥栄が“2つの耳状貼付け”と説明した土器、「口縁部外壁に2箇の三角状突帯を有するもの」の存在も新たに加えられた。後者については「やや後出のものと考えられる」としている。これは、前述の小山遺跡出土の石坂変形土器との関係を検討する上で注意すべき指摘である。

また、轟式土器の系統との関係について「轟式系統の土器では、貝殻を器面調整具として用いているが、石坂式土器の場合は、施文具として使用している点が異なっており、

系統の異なる土器文化として取り扱う必要がある」と述べ、土器製作者の貝殻の使用に対する基本的姿勢の相違をイコール系統の差として示した。これは先に大脇が轟系貝殻文土器の貝殻条痕が地文として、石坂・吉田系土器のそれが意匠文として施されていることを指摘したことに通ずる見解である。

ところで、石峰遺跡の発掘調査がそうであったように、南九州でも1970年代以降、大規模開発に伴う発掘調査が徐々に増え、縄文時代早期の資料も爆発的に増加した。そのような中で、新東晃一は「南九州の火山灰と土器形式」と題する論文を発表し、南九州における縄文早・前期の土器型式が、鬼界カルデラを噴出起源とする広域火山灰：アカホヤ火山灰の上下で異なることを示した（新東1978）。それは、アカホヤ火山灰の下層で塞ノ神式土器・平橋式土器・押型文土器・前平式土器・吉田式土器・石坂式土器などが、上層で轟式土器・曾畑式土器などが出土するというものであった。

さらに、その後発表された「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」では、南九州の縄文早・前期土器の編年試案を示し、アカホヤ火山灰降下を早期と前期の境界とした（新東1980）。それは、南九州で発生、発展していった土器文化がアカホヤ火山灰の降下により消滅し、植生の回復を待って、北西九州の土器文化が到来する。という見解で、アカホヤ火山灰の与えた影響は土器文化をも変化させたというものであった。自然現象を時期区分の境界とすることへの疑義もあるが（河口1985）、土器文化を変化させるほどの自然現象であったという解釈も成り立つであろう。それは、単に土器文化の変化を意味するにとどまらず、人間活動を取り巻く諸様相の変化でもあった。少なくとも、火砕流の到達した範囲においては、壊滅的ダメージを受けたであろうことは想像に難くない<sup>2)</sup>。

このように新東がアカホヤ火山灰の鍵層としての有効性を指摘したことは、塞ノ神式土器や手向山式土器等の出自を曾畑式土器や轟式土器に求めるといったこれまでの考えが明確に否定されたわけで、縄文時代早・前期の土器編年研究にとってはまさに画期的なことであった。つまり、大脇論文以来取りざたされてきた轟式土器と貝殻文円筒土器との関係も、この“アカホヤによる分断”によって、時期・系統の相違が明らかになったわけである。ただ、轟式土器とアカホヤ火山灰層との関係については意見の分かれるところであり、今後検討を要する重要課題である。これについては稿を改めて述べたい。

さて、アカホヤ火山灰を早期と前期の境界とした新東は、早期を前葉・中葉・後葉の3つに区分し、アカホヤ火山灰降下直前までに塞ノ神式土器が南九州に一大文化圏を形成していたとして後葉に位置づけ、その前段階の土器型式群、つまり石坂式土器・吉田式土器・前平式土器といった貝殻文円筒土器を前葉末から中葉に位置づけた。ただし、貝殻